

ワカサギ、シラウオの調査

(宍道湖・中海水産資源維持再生事業)

松本洋典・三浦常廣

1. 研究目的

宍道湖・中海におけるワカサギ、シラウオの資源・生態と、それを対象とする漁業の実態を明らかにし、これら資源の維持・増大を図る。

2. 研究方法

(1) ワカサギ産卵状況調査

平成21年2月に斐伊川河口から約2km上流の灘橋までの間に設けた計24箇所調査船わかさぎ丸(0.8トン)を用い、エクマンバージ採泥器(0.02m²)で採泥した。試料は10%ホルマリンで固定し、実験室でローズベンガルで染色を行い、付着器が膜状のものをワカサギ卵とした。

(2) 稚魚分布調査

平成20年6月25日に宍道湖および新建川・船川の計18箇所調査船わかさぎ丸を用い、桁引網(目合2mm、全長26m、桁長4.5m)により各箇所30m曳網した。

(3) ワカサギの溜池移植放流後追跡調査

平成13年5月に移植した農業用溜池(約110m×約25m×深さ約6m)のワカサギの生産実態を調べた。

3. 研究結果

(1) 産卵の状況(添付資料参照)

採泥箇所数24箇所のいずれからもワカサギ卵は全く採集されず、18年以降の危機的な状況はさらに深刻になった(参考:14~17年度平均2,005個)。

(2) 稚魚の分布状況(添付資料参照)

今年度の1曳網当たりのワカサギ稚魚平均入網尾数は2.86尾で、低水準ではあるものの(14~17年度144~279尾)、昨年より0.76尾からはやや持ち直していた。一方、シラウオは6,449尾(同933~2,183尾)と、かなり高

水準であった。

(3) ワカサギの溜池移植放流後の漁獲実態

移植放流後は無給餌で再生産が行われており、昨年は約26,000尾(23kg)のワカサギが取上げられ、今年度も期待されたが、今年度はわずか5尾の収穫しか得られなかった。漁獲魚を持ち帰って鱗を使った年齢査定を実施したところ、すべて満2歳であった。

(4) 今年度の漁獲

平成20年度の定置網漁獲記録(宍道湖漁協集計)では、ワカサギの漁獲は0(採卵用の親魚漁獲ですら12尾に過ぎない)であった。平成20年2月の産卵量調査結果、および平成20年6月の稚魚分布調査結果では昨年度よりもやや持ち直していたにもかかわらず、このような結果になったのは、平成6年以来の猛暑渇水に見舞われた夏期の影響であると考えられる。現在の宍道湖におけるワカサギの資源構造が危機的な状況であることが示唆された。一方シラウオは約7tの漁獲があり、近年では豊漁と言える水準であった。

4. 研究成果

- 得られた結果は、宍道湖漁協のます網組合の役員会および総会、また宍道湖・中海水産資源維持再生事業検討会でも発表した。
- 平成19年度漁期から実施された、1ヶ月間(1/15~2/15)の刺し網の宍道湖全域禁漁は、当面の間継続されることとなった。
- ため池利用については、平成21年3月8日に諏訪湖産発眼卵およそ10万粒を放流し、今後の推移を見守ることとなった。